

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12826

研究課題名（和文）新優生学が前提とする遺伝子観に関する研究

研究課題名（英文）Research on the views of genes assumed by the new eugenics.

研究代表者

赤塚 京子（Akatsuka, Kyoko）

京都大学・iPS細胞研究所・特定研究員

研究者番号：90814244

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、子孫への遺伝子操作をめぐる倫理的問題の検討を通じて、新優生学思想がどのような遺伝子観を前提としているのかを明らかにすることにより、この思想を評価するための視点を獲得することである。本研究を通じて、新優生学が医学モデルとしての障害や疾患像を前提とし、遺伝子を身体から独立した客観的に評価可能な対象として捉える向きが強いことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

遺伝子操作や生殖医療技術等の発展に伴い、子孫の遺伝形質の介入に伴う倫理的問題の検討は学術的にも社会的にも喫緊の課題である。こうした技術をめぐる倫理的問題と関連する新優生学に対する評価が定まらない現状において、本研究は新優生学思想の一端を明らかにすることでこの思想を評価する視点を提示することに貢献した。

研究成果の概要（英文）：This study aims to reveal the view of genes assumed by the new eugenics by examining the ethical issues surrounding genetic engineering into offspring to acquire a perspective from which to evaluate this ideology. Through this study, it was suggested that the new eugenics assumes the image of disability and disease as a medical model and is strongly oriented towards viewing genes as objectively assessable entities that are independent of the body.

研究分野：生命倫理学

キーワード：新優生学 遺伝子操作 遺伝子観 生命倫理 デザイナー・ベビー

1. 研究開始当初の背景

CRISPR/Cas9 の登場を機に、人を対象とした遺伝子操作の可能性が現実味を帯びてきている。2018 年には、中国で親子間の HIV 感染を防ぐ目的で CRISPR/Cas9 を用いて遺伝子操作を行った受精卵から双子が誕生したというニュースが世界的に報道され、いよいよこの技術をめぐる倫理的問題の検討が早急に求められる状況になったといえる。ゲノム編集技術によって、「健康な子供がほしい」「より優秀な子供がほしい」という親の希望を実現できる可能性は高まるが、他方、この技術の利用に対しては「生命の選別(優生思想)に繋がる」ことが懸念されている。優生思想に対する懸念は直観的に共感できるように思われる一方で、論理的に妥当なものであるかどうかは、優生思想の何が問題であるのかという問い無くしては応答することができない。そしてこの問いに応答するには、優生思想を理解することが不可欠である。

1970 年代以降、優生学史の研究が盛んに行われるとともに、優生思想のタブー化は進んでいった。しかしながら、2000 年代以降、優生思想を取り巻くそうした風潮に変化がみられるようになった。生命倫理学分野を中心に、歴史上、多くの犠牲者を出した優生思想を断罪しながらも、着床前診断や出生前診断をはじめとする生殖医療技術や受精卵の段階での遺伝子操作による生命の選別を擁護する議論が登場したのである。そうした議論を展開する論者の多くは、個人の生殖の決定に国家(第三者)が強制的に介入し、生殖の権利を踏みにじった点こそ過去の優生思想の悪しき点であるとする一方で、個人(親)が自発的な選択に基づき、先端医療技術を用いて子孫の生命の選別を行うことを新しい優生思想(以下、新優生学)としたうえで擁護してきた。新優生学はリベラル優生学と呼ばれることもあり、自由主義的な価値観をその支柱にしており、他者に危害が及ばない範囲で親の自己決定に基づいて子孫の遺伝形質を選択(選別)することを容認・推奨する思想や実践である。

こうした新優生学の登場に伴い、「優生学 = おぞましいもの」という見方は揺らぎつつある。生殖をめぐる自由として新優生学を擁護する論者もいれば、新優生学の本質をかつての優生思想と同一と捉え批判する論者もいるなかで、新優生学に対する評価は様々である。そして、こうした現状が示唆するのは、新優生学をどのように理解し、どう評価すべきかを決定づけるだけの材料を我々が十分獲得していないという可能性である。

今日、遺伝子診断技術、生殖医療技術、さらにゲノム編集技術等の精度向上に伴い、子孫の遺伝形質への介入が現実味を帯びている中、こうした技術をめぐる倫理的問題に深く関わっている新優生学思想が含意する価値観や論理的妥当性を検討することは重要な課題であるといえる。

2. 研究の目的

本研究は遺伝子操作やデザイナー・ベビーをめぐる倫理議論において新優生学が前提としてきた遺伝子観がどのようなものであるかを明らかにし、新優生学を評価するための視点を獲得することを目的とする。

3. 研究の方法

英米圏の生命倫理学で蓄積されてきた遺伝子操作やデザイナー・ベビーをめぐる哲学・倫理学議論を対象に、当該技術をめぐる倫理的問題を整理し、新優生学を軸とした論者間の対

立構造を明らかにしたうえで、各論者が前提としている遺伝子概念や遺伝学的知見を分析し、特に、子孫への遺伝子操作や新優生学を擁護する論者が前提とする遺伝子観を明らかにする。

4. 研究成果

遺伝子操作やデザイナー・ベビーをめぐる既存の議論の全体像を把握するために、関連する文献を収集し、その内容を整理した。その際、子孫の遺伝形質への介入ないしは新優生学に肯定的な論者 (e.g., N. Agar, A. Buchanan, J. Harris)、子孫の遺伝形質への介入ないしは新優生学に批判的な論者 (e.g., R. Sparrow, M. Sandel, J. Habermas)らの議論や、それらを引用したものを中心に検討をすすめた。少なくとも、a. 技術の安全性の問題、b. 社会的格差の問題、c. 障害者やマイノリティに対する態度の問題、d. (主に誕生する子供の)自由や自律の侵害に関する問題、e. 遺伝的不平等の問題、f. 遺伝的多様性の問題をめぐって、両陣営が対立していることを把握した。

そのうえで、特にcやeの議論は、各論者が前提としている遺伝子観の分析に適していると考え、遺伝性疾患(障害)をはじめとする特定の遺伝形質が各議論においてどのように論じられているのか、遺伝的多様性に対してどのような価値づけがされているのか、等について着目し検討を進めた。併せて、遺伝や遺伝子の概念をめぐる哲学的議論に関する文献、新優生学思想と関連の深い自由主義に関する文献、19世紀後半から20世紀初頭の優生学や優生政策について扱った歴史学や思想研究に関する文献、近年進展をみせているエピゲノム編集に関する倫理議論に関する文献を補完的に講読し、分析や考察を進めるうえでの足がかりとした。

こうした作業を通じて、新優生学が前提としている遺伝子観について考察を進めた。遺伝子操作を容認する議論は、特に特定の遺伝子変異に起因する重篤な疾患や障害の回避が子のよりよい人生に結びつくことを理由に技術の利用を支持する傾向がある。そうした主張の背景には、医学モデルとしての障害や疾患像(よって医療技術による問題解決を重視する価値観)が存在し、ある種の遺伝子はQOLや医学的妥当性などの評価軸によって子孫に継承すべきかどうか決定できるという前提が確認できる。一方で、そうした評価は文脈依存的な側面があり、常に絶対的に評価できるわけではないとされている点には注意したい。つまり、どのような人生においてもウェルビーイングを極端に低下させる遺伝子や向上させる遺伝子は存在するという立場をとりつつも、どのような遺伝形質が最も優れているかは文化的・社会的文脈に依存するため一概に決定づけられないという立場をとる。さらに、新優生学は、特定の遺伝子について価値判断を下す一方で、そうした遺伝子を保有する者の生そのものに対して評価を下さないことを強調する。言い換えれば、新優生学にとって、遺伝子は身体から独立した評価可能な対象として捉えられる存在であるといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Akatsuka K, Sasaki-Honda M, Sawai T.	4. 巻 20(8)
2. 論文標題 Ethical framework for next-generation genome and epigenome editing.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 American Journal of Bioethics	6. 最初と最後の頁 32-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/15265161.2020.1782524.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Sasaki-honda Mitsuru, Sawai Tsutomu, Akatsuka Kyoko
2. 発表標題 Philosophical Reflections on Value of Intractable Diseases.
3. 学会等名 16th World Congress of Bioethics 2022（国際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

京都大学iPS細胞研究所 上廣倫理研究部門 https://uehiro-ethics.cira.kyoto-u.ac.jp/publications/
--

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------